ゾンビがやって来た

紅葉貴久弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ゾンビがやって来た

【Ｎコード】
Ｎ１０６１Ｖ

【作者名】
紅葉貴久弥

【あらすじ】
俺、伊月雄斗は高校の一年生さ☆

ある日、ゾンビが出てきてさぁ大変。
不運にも俺はゾンビを大量に殺したこと（死んでるのに殺したって言う？）で第一線で戦うことを余儀なくされた。
さぁ、この世界で俺は生き残れるか。それとも、バットエンドが待ってるか。

第一話　壊された世界と壊れてる俺（前書き）

拙い作品です。けれど、よかったら読んでください。

第一話　壊された世界と壊れてる俺

ゾンビ？なにそれ？

そんなことが言える時間は終わった。

俺たちは今、学校の校舎にいる。

それは十分前に起きた悪夢だった。

「眠い……」

俺、伊月雄斗（いつきゆうと）はただの高校生だった。ゾンビが巣くう世界に放り出されるとも知らなかった、な。

「眠いって、雄斗。ノート貸さないぞ」

「いやいや、それはチートだ反則だ」

「うるさい。っと、授業が始まるな」

俺の神経を逆撫でしてきたあいつは……工藤翔（くどうしょう）は我が校サッカー部のエース（一年のね）そしてイケメン、リア充爆発しろ。

さて、英語だし外でも見てよ。

……なにあれ？服がボロボロの男が入って来た。いや、それだけならいい。だが、脇腹が無い（・・・・・）。

「なんだよあれ！？」

俺は立ち上がっていた。端から見たらイタイ子だろうな。でも、俺の席の前の女子が悲鳴を上げたところでみんなが集まってくる。そして見てしまった。ソイツが先生を食べているところを……。

「なんだよ！あれっ！」

「ぞ、ゾンビ！？」

あぁ、恐らくそうだろう。首が半分も無いのに食われた先生が立ってるもんな！

「う、うわぁ～！」

一人の男子生徒が逃げた。それを皮切りに次々に生徒が逃げようとする。その行為が死を招くと知ってるやつ以外は。

「おいっ、どうする？雄斗」

「どうするって、みんながいなくなったら逃げるに決まってんだろ！」

「伊月の言う通りだな」

ハイ、出てきました。イケメン二号。

「コラ、ゾンビ！食うなら、イケメンをく……」

ハイ、殴られました。テヘッ☆

ついでに殴ってきたのはイケメン二号（俺命名）こと笈川涼（おいかわりょう）名前通

りの爽やかボーイさ★
「んじゃ、突破しますか」
と唐突な俺。だって、俺の目の前、こいつら以外ゾンビだもん。
「ウォォォォ」
「死ね！」
俺は自分の椅子でゾンビの頭を陥没させ、蹴り飛ばす。うわっ、靴にメッチャ血がついた……。
周りを見ると工藤も笈川も俺と同じようにしていた。
「キャー、二人ともカッコイイ☆」
「「お前、死ねば」」
「……ジョークだ」
さすがに余裕を保つにも限界が来た。団体様が来たからな。
「何匹、いん、だよ！」
「知ら、ない」
「工藤、笈川！俺に構わず先に行け！」
「「わかった！」」
二人はゾンビがいない前の扉から逃げました☆ツッコミ（。。；）

＼（ー ー；）欲しかったな。まぁ、アイツらに被害出さなくてすむからいいか。

「よぉ、腐った死体共。爆死、したいか？」

俺はバックからライターと制汗剤、ハサミを取り出し、制汗剤にハサミを突き立て、引き抜き、ゾンビに投げます。火をつけたライターを投げます。俺は全力ダッシュ。

すると、ハイ爆死（爆）。

「さて、アイツらはどこかな？」

こうして、俺たちのゾンビから逃げる生活が始まった。

第一話　壊された世界と壊れてる俺（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしてます

第二話　性格の破綻は気にするな！（前書き）

伊月雄斗（いつき　ゆうと）
年齢：１６
身長：１８２？
特記事項：小さい頃から、性格破綻のため友達が少ない。
戦闘だけなら、普通でも性格破綻モードでもかなり強い。
本作品の主人公　　今の武器：金属バットと木刀

ステータス

頭脳：★★★☆☆
戦闘力：★★★★★
ユーモア：★★★★☆
統率力：★☆☆☆☆
顔の良さ：★★★☆☆

前回のあらすじ

ゾンビは爆死が御好きなようです。

第二話　性格の破綻は気にするな！

俺はゾンビを大量に爆死させ、ひきつった笑顔で廊下を疾走していた。

「あはは、なにこれ？はっ、ひょっとしてモテ期……でも、ゾンビはイヤ～！」

簡単な説明が入ります。

俺は教室でゾンビを爆死させ、意気揚々に教室から出ました。そこにはゾンビ、ぞんび、ＺＯＭＢＩＥ！どうやら、爆発の音でたっくさん来たようです（＾－＾）／

って、笑えねぇ！いくら、性格破綻した俺でも笑えねぇ！だって、走って逃げてもゾンビだらけで生存者はいないしぃ～。

アイツラ、ガチニゲシヤガッタ。俺は先に逃げた二人を軽く恨んでいた。

そして、今に至る。

「えっと、部活棟、部活棟。って、ゾンビ！？」

俺は後ろもゾンビ前もゾンビに追い込まれた……ワォ、ゾンビパラダイス？

「ぐわぁぁぁあ」

「えっと、まずは落ち着こう。ゾンビ、お前はすでに死んでいる…

…当たり前だよ！」

つか、本気でヤバイ。後ろのゾンビと前のゾンビの間隔約３メートル。

絶　対　絶　命

「クソッ、どうしたら」

俺は窓枠に触れた。……窓枠？そうだ窓枠だ！

「Ｉ　ｃａｎ　ｆｌｙ！」

俺はとっさに窓を開き、降りた。あぶねぇ、ゾンビの手が俺の背中に一瞬触れた。だけど、危機は去ってない。降りたのは三階……普通は即死☆

でも、俺は死なない。だって、二階の塀に降りたんだもん。

「グッバイ、ゾンビ」

俺は俺を追って、落ちるあわれなゾンビを見ながら、工藤と笈川を探した。

まずは部活棟で金属バットと木刀で武装し、電話をかけた。

『もしもし、雄斗、無事か？』

「無事か？じゃねぇ！俺は死にかけたぞ」

『わかった、わかったって、今は職員室にいるから来い』

「へーイ」

そこで電話を切る。周りには十匹ほどのゾンビが……憂さ晴らしの相手に来てくれた。

「さぁーて、いくぜ！死体共」

俺はバットと木刀で最初から二匹のゾンビを撲殺、つか、いい響きじゃね？ボ・ク・サ・ツ。

「ハッハッハッ、喝采、喝采、大虐殺！ヒーハー！」

ＮＯＷ　ＬＯＤＥＩＮＧ

気がついたら、周りは血の海。俺も血まみれ。気分はジェーソン！

「あぁー、また殺っちゃった」

俺はどうやら興奮すると性格破綻し、皆殺しにしてしまうらしい。

（＾－＾）ｂ

さて、行くか。

◇

ドカッ、ギャアー。

そんな音が聞こえては消え、聞こえては消え、近付いてきた。

私はそっとドアを開いた。その先にいたのは……バットと木刀で武

装した男子生徒でした。

「君たち……生存者？」

「えっ！？は、はい」

「よかった。俺たち以外にもいたんだ、生存者。よしっ、来なよ。俺たちが助けてやるよ」

男子生徒は血まみれになりながら、快活な笑みを浮かべていた。

◇

（まさか、生存者がいたとはな……それも女子。キター！多分、アイツラの方いくけどキター）

俺はにやけそうになるのを我慢し、名前を聞いた。

「えっ、私は高島由紀（たかしまゆき）です。一年です」

「私は飯田恵（いいだめぐみ）」

「私は……霧崎雅（きりさきみや）」

「ふーん」

「で、奥にいるのは。竹下くんと阿倍先輩」

高島の指が示した方向を見ると……ハッテンしている男子たちが……。

「うん、放置してあげよう」
「ダメですよ！えっと……」
「雄斗、伊月雄斗。同じく一年だ」
「えっ！あの性格破綻者の！？」
「なんだよ！性格破綻のなにが悪い！そんなどうでもいいじゃないか！」
「「んっ、イイ男。やらないか」」
「やらないよ！」
「あのっ、ゾンビが……」
「んっ、ハァー」

俺はため息をつき、手にしたバットと木刀を構え、新たに来たゾンビ御一行に突撃した。

もちろん、性格破綻モードでね。

「消えろや！ヒャハハハハ」
「「「……ヤバすぎ」」」

女子三人が俺を見て、そんなことを言い始めた。まぁ、慣れてるけどさ。やっぱ、傷付くんだよな。

俺はそう思いながら、ゾンビの脳天に踵落としを決めて、周りの奴等にもバットと木刀を振るい倒す。

「危ない！」

「んっ？」

声がする方向を見ると、俺に向かってゾンビが跳躍、落ちてきたところだった。

「バカか？なめんなぁ！死体が」

俺はバットを振るい、ソイツを永眠させてやる。

「高島さん、ありがとう」

そうお礼を言って、再び殺戮を始めた。

◇

私は無意識に叫んでいた。彼が死ぬ、そう思った瞬間に口が動いていた。

「どうしたの？由紀」

「わかんない。気づいたら、叫んでた」

それだけ言うと、彼がこっちに戻ってきた。

「大丈夫か？って、俺が言っても恐いよな？」

彼は、伊月さんは笑っていた。

「……大丈夫です。それより」

「あぁー、もうなんも言うな。職員室にいくぞ。工藤と笈川が待ってるから」

「「ホント！」」

「騒ぐな。また襲われたいのか」

伊月さんはそれだけ言うと歩いて、先に行っちゃいました。私はすぐに彼に駆け寄りました。謝るために。

◇

「ごめんなさい！」

「……なにが」

すごく不愉快な雰囲気を出しながら、言った。大抵はこれで逃げるんだよな。

でも、高島さんはビクッと肩を震わせただけでそれ以外動くことはなかった。

「ハァー、頭を上げてくれ、高島さん。早く行こうぜ」

俺は赤くなった顔を見られないようにするためにスタスタ、歩いていった。

◇

「オイオイ、ゾンビパラダイスかよ……」

職員室には五十を越えるゾンビがいた。まぁ、予想通りだからいいけどさ。

「みんな、離れてろ」

俺は高島たちに指示し、制汗剤とマッチを持ち、空き缶を俺は足元に落とした。

カンッ、カンッ、カンカンカン。

一斉にこっちを向くゾンビ、ぞんび、ＺＯＭＢＩＥ。その中でも、俺は落とした空き缶を拾い、中庭に投げた。

そこに群がるゾンビたち。更に穴を開けた制汗剤の缶を投げ、続いてマッチ投下。

「燃えろ。肉塊が」

マッチが落ち、爆発、爆風、俺はドアを閉めて職員室に入った。

「性格破綻者、なめんなよ」

第二話　性格の破綻は気にするな！（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしています

第三話　こういうときに必要なのは情報と武器（前書き）

工藤翔（くどうしょう）

年齢：１５

身長：１７６？

頭脳：★★★★☆

戦闘力：★★☆☆☆

ユーモア：★★☆☆☆

統率力：★★★★☆

顔の良さ：★★★★★

特記事項

雄斗の数少ない友達。
サッカーは激強
戦闘はあんまりよくない

前回のあらすじ

性格破綻者なめんなよ

第三話　こういうときに必要なのは情報と武器

「生きてたか！雄斗」

「よかった。心配したぞ」

「お前ら！それ嘘だろ！俺にツッコミ無しで走って逃げたよな！」

「「俺に構わず先に行け！って、言ったから」」

「言ったよ。言ったけど、なんかあるでしょ！リアクションが！」

「頑張れとか？」

「幸運を祈るとか？」

「ちげぇよ！ってか、もう疲れたよパトラッシュ」

「「フランダースの犬かよ」」

「そういうのだよ！」

俺と翔と涼は三人で言い争ったため高島、飯田、霧崎、竹下、阿部先輩は職員室の入り口付近で突っ立っていた。

「で、あの人たちは？」

「生存者。こっちに来て自己紹介してくれ」

「あっ、ハイ。高島由紀です」

「飯田恵です！」

「……霧崎雅」

「竹下　登（のぼる）です。どうです？今夜」

「ＤＡＩＧＯのおじいちゃん！？」

「阿部　貞夫（さだお）。二年だ。やらないか？」

「「「やらないよ」」」

「次は俺たちだな。俺は工藤翔」

「俺は笈川涼」

「さて、自己紹介はもういいよな。んじゃ、これからどうする？」

「あぁ、職員室のテレビを見たが……ゾンビのニュースはなかった」

「それだけだと、人為的なのか自然発生かがわからない」

「そうか……じゃあ、俺からはゾンビの習性かな。まず、１つにゾンビは頭を潰す以外に死にはしない。２つ目は視力が弱い。ただし、聴覚・嗅覚は並外れて高い。３つ、痛覚がない。４つ、動きが緩慢だ。まっ、これぐらいだ」

俺がそう言うと高島が１つ付け加えた。

「ゾンビに噛まれたらゾンビになっちゃいますよ」

「それだけだと、映画のゾンビだな……笑えやしねぇけど」

「……だぁー！辛気くさいのはヤメだヤメ。生き残ることを考えよう。なんかないか？」

「雄斗の言う通りだな。俺はまず武器および食料を確保させるべきだと思う」

「さっすが、工藤くん。キィレッル～」

「よし、雄斗を抑えろ涼」

「わかった」

「わかるな！黙れいいんだろ。黙れば」

「わかればいい。他には……えっと、飯田さん」

「拠点を作るべきだわ」

みたいな感じに会議は進み、その間俺は教師の机を物色していた。

「おっ、こないだカズが没収されたエロ本とライターだ。ラッキー。っと、こっちは警棒？なんであんの。んで、こっちは……えげつねぇな。おいっ」

俺はトカレフを見つけた。トカレフの弾を約２０発見つけた。

「お～い、み～ん～な。銃見つけたぞ」

「「「「「「「「はぁっ？」」」」」」」」

いやぁ～、みなさん、イイハモりですこと。でも、事実は事実。現実受け止めてねぇ。

「……まじかよ」

「それより決まったか？」

「あぁ、まずは俺の家に行って、そこで一晩明かそう」

「ＯＫ」

俺はトカレフを高島に投げ、金属バットを持って立ち上がった。ついでに翔は木刀。涼は机の足。阿部先輩はスパナ。竹下、飯田、霧崎、高島はモップ（高島は銃持ち）。

「あ、あの。これ、どうしたら……」

「持っといて」

俺は笑顔で職員室から出て、そこにいたゾンビを早速撲殺した。

◇

どうやら、数は減ったらしく（恐らくは俺のせい）簡単に外に出れた。阿部先輩が男子なゾンビを持っていこうとしたが棄てた。

「意外と楽に行けそうだな」

「そうだな」

今、俺たちは大通りを歩いている。いまじゃ、大通りというかゴーストタウンになった通り道だけどな。

「よし、止まれ」

「どうした翔？……笑えねぇ風景だな」

ハハハハハハハハ、またまた出てきたよ。ゾンビ、ぞんび、ＺＯＭＢＩＥ！これ三回目だぞ。いい加減ヤメロや！

「よし、爆死させるか」

「落ち着け、周りの民家はほぼガスだぞ」

「爆死はみんなの憧れさ☆」

「だ、誰も憧れませんよ」

「でも、どうするの？」

「そ、それは……」

「やっぱ、爆破だ」

「「「「「「「ダメ！絶対！」」」」」」」

「麻薬並みの批判！？」

そんな不毛な争いを続けてもゾンビは動かないわけで……。

「ハハハハハハハ！もういい、燃やしてやろう！なにもかも、全て！」

「それです」

「由紀！？おかしくなっちゃたの？」

「爆破させずに燃やすんです」

「あっ、なるほど。んじゃホイ」

高島の案を一瞬でやる俺、シビレルゥ～憧れるぅ～。

やり方。

エロ本に火をつける。ゾンビに投げる。ハハハハハハハ！燃えろ、燃えろ！

「マジでやりやがった」

と呟く笈川涼。見たか！華麗な一撃。

十分後……ゾンビがたくさん来ました。テヘッ☆

「バカコンビ！」

「す、すいません」

「ここなら、いいか。ハハハハハハハ！グレネーグヘッ」

「させるか！もっと離れてからにしろ」

「ヤバイ、禁断症状が……爆破こそ正義！」

「アホか」

「離せ！ここならお前の家に被害は出ん。俺たちはあるけど……グレネード！」

俺がスプレー缶を投げた瞬間に首根っこをホモコンビに掴まれ、ライターを適当に投げました。

何が起きたと思う？

正解は……大爆発☆

民家のガスボンベが開いてたらしく、それはもうクレイモア。爆発サイコー！

無事に家に到着。

さて、寝よう。

第三話　こういうときに必要なのは情報と武器（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしています

第四話　チェーンソーって、一般人が持ってるのおかしい？（前書き）

笈川涼（おいかわりょう）
年齢：１６
身長：１７５？
特記事項
イケメン二号で雄斗のストッパー役。（あまり成功しない）
ステータス
戦闘力：★★★☆☆
頭脳：★★★☆☆
ユーモア：★★☆☆☆
統率力：★★★★☆
顔の良さ：★★★★★
前回のあらすじ
大爆発サイコー！

第四話　チェーンソーって、一般人が持ってるのおかしい？

「寝るな！」

「なんだと！一番の功労者だぞ。俺は！」

「俺らは殺されかけたよ。お前に」

「えっ～。あの爆発はわざとじゃないよ。ただあの家の人たちが悪いんだよ」

「あのな……もういいや、翔、テレビつけてくれ。あっ、音量低めでな」

「ＯＫ」

そういうやりとりをやっている間にも俺は周りの話を聞いていた。

「伊月くんたちって、落ち着きすぎてない？」

「うん。私はすごいと思う」

「……私も」

うん、高評価。ヤッタ。

あっ、そういや俺の家もここから近いんだった。ちょっと武器取りに行くか。

「翔、鍵閉めとけよ。俺は自分の家に武器取りに行くから」

「一人で大丈夫か？（主に周りが）」
「心配すんな、一時間で帰ってくる」
「あのっ、私も行きます」
「俺も行くよ。もしかしたら、やれ「やれませんよ」」
「んじゃ、雄斗と高島さん、阿部先輩ですね。頑張ってください」
「おう」
「はい」
「あとで……」
一人だけ、涼の方向を見ずに絡まってるけど無視。
「行こう」
俺はそれだけ言うと二人を連れ、死体が蠢く地獄へと進んでいった。
◇
「高島、今から帰ってもいいぞ」
私はいきなり、伊月さんから「帰ってもいい」と言われました。
「いいです。私だって役に立ちたいんです」

「あっそ、んじゃ死ぬなよ。仲間は殺したくないからな」

伊月さんはそれだけ言って、家への案内に徹していました。

最初は怖かったけど、この人は多分、人一倍傷ついても誰かのためになにかをしようとする。

なら、手伝いたい。そう思い始めていた。会ってから、数時間でそう思えた。それだけの魅力はあると思った。

私は彼の背中を追って、走った。

◇

「ゾンビはいないな。他の市に行ったか……」

「さぁ？それよりここかい」

「そうです。行きましょう」

俺は家に向かい歩いた。そして、玄関には行かずに裏に周り、物置の物色を始めた。

「なにかありましたか？」

「高島か……お前、これ使えるか？」

俺は折り畳み式のナイフを高島に渡した。

高島は物珍しそうにナイフを眺め、

「使えます」

と言った。

「よしっ、持ってろよ。それ。阿部先輩ー」

「どうした？」

「これ、予備にどうすっか？」

俺はスパナ、鉄ハンマーを手渡した。

「いいね。それより、君のは？」

「俺？俺はこれッスッ。ジャジャン、チェーンソー。いやぁ～、祖父の道具がこんなとこで役に立つなんて……どうした？二人とも？」

「一般人が持ってるのおかしいな～。って、思って」

「う～ん、バキューン切断するの？大丈夫、交わってやるから」

「遠慮します！あ、あと、大工だからこんなのもあったんだよ」

俺はチェーンソーのエンジンをふかしながら、答える。

かなり大きい音なので、近くにいたのかゾンビがやって来た。

さぁーて、ショータイムのスタートです。種目は胴体＆頭の切断。

殺りますか。

ヴゥルン、ヴゥルン、ヴァルル。ギュリーン。

甲高い金属音が鳴り、俺はそれをゾンビに降り下ろした。
真っ二つだぜ。
「ヒャッホー！ヤッベ、病み付きになりそう」
俺のそのセリフに高島は苦笑いしていた。
◇
「ただいま！」
「不法侵入！？」
「え～、ピッキングだよ。それより、お土産」
俺は背負っていたバックを下ろし、中を見せた。
そこには、金槌、スパナ、電ノコ、金属バットなど武器ばっかり。
「高島、お前のも見せてやれよ」
「は、はい」
高島のバックからは大量の花火とパイプ。
既に下ろしていた阿部先輩のからは改造エアガンとパチンコ玉。
全部、俺のです。テヘヘ☆
「これだけあれば、武器には困んねぇな」

「爆破もね☆ヤッベ、興奮してきた」

その日一日は俺の俺による俺のための爆弾作りが始まったのは言うまでもない。

第四話　チェーンソーって、一般人が持ってるのおかしい？（後書き）

ご意見・ご感想お待ちしています

第五話　いかがいたします？　じゃあ、コーラで！（前書き）

高島由紀（たかしま ゆき）
年齢：１５
身長：１５６？
ステータス
戦闘力★★☆☆☆
頭脳★★☆☆☆
ユーモア★★☆☆☆
統率力★★★☆☆
顔の良さ★★★★☆
人物説明
ゾンビ襲来時に仲の良い友達と共に学校のある一室に避難、籠城。
ゾンビに出入り口を囲まれたところを雄斗が通りかかり、殲滅、救助がきっかけで雄斗と出会う。
天然でアホなため雄斗の次に危険人物扱いされている。
良い子。

第五話　いかがいたします？　じゃあ、コーラで！

「起きてください。伊月さん」

「んだよ。爆弾製造で眠いんだよ」

「いいから、起きろー！」

「のわっ！いでっ」

俺は寝ているところを高島にひっくり返され、あえなく床に落ちた。
そして、腰を打った。

「いって～、なんだよ！」

「大ニュースです。ゾンビが全世界で同時発生しました」

「まじかよ……」

俺は階下に走り、テレビのあるリビングに飛び込んだ。

「どんな感じだ！？」

「……最悪だ。救助は来ないだろう。しかも、安息の地は、
もう、どこにも、ない！」

その言葉は周囲を落胆させるには充分だった。

「……とにかく、生き残ろう。……絶対に生き残るんだ！」

「さすがだな。翔……そうだな、お前の言う通りだ。俺は諦めない。みんなで生き残ろう！」

「「「「「「「おう！」」」」」」」

翔と涼の言葉で俺たちはなんとか、絶望から脱け出すことができた。

ホント、スゲェよ。

「で、これからどうする？」

「そうですね。ここを廃棄しましょう」

「いいのか？もうどこにも安全な場所なんかないんだぞ」

「いいんだ。これからの行動目標は自衛隊の駐屯地に向かい、保護してもらうこと。それと、みんなで必ず生き残るんだ！」

「そうか。よしっ！頼むぞ涼。みんなもいいな！」

「「「「「わかってる」」」」」

「んじゃ、行くぞ！」

「「「「「「「おう！」」」」」」」

そうして、その日、俺たちは生まれ育った家を町を……棄てた。

生き残るために。

「どうする？」

「まずは食糧の確保、そして、安全に寝れるところを探すかな」

「オーケー。なぁ、誰か電動ガン使ってみてくれよ。絶対におもしろいからさ」

「わ、わたしは遠慮します」

「私も」

「霧崎は？」

「……撃ってみたい」

「「雅！？」」

「なら、僕にも」

「いいぜ。絶対に頭を狙えよ。まぁ、パチンコ店で弾は補充できるからな。遠慮せずにぶちかませ」

俺はさぞかしにやけながら答えていただろう。

「……わかった」

「う～ん、たまらないねこの太さ……先輩のくらいあるんじゃ」

「竹下、それは妄想だけにして～。マジ泣きするよ」

「「……見てみたい」」

「んっ、なんか言ったか？」

「い、いえ何も！」

「言ってません」

「？そうか、行こうぜ」

俺たちはそこで会話を切り上げ、道を進む。

にしても、高島は慌てすぎだろう。あんま、根詰めさせないようにしないとな。ああいう奴ほど、死にやすいからな。

ポチャ、ピチャッ。

「なんの音だ？」

「水滴じゃね？」

ポチャ、ピチャッ、ピチャビチャ。

「な、なんか、おかしいですよ！」

いや、俺としては美味しい役だな。高島の胸が俺の腕を圧迫して……やべぇ、興奮しちまうだろうが！

ピチャッ、ドンッ。

そう、音をたて、液状化したゾンビ（・・・・・・・・）が落ちてきた。

「はは。今度はスライムかよ。タイラントとかの方がまだキモくねぇぞ」

「あぁー」

「なめんな！」

俺はチェーンソーで近づいてきたそいつを斬りつけた、はずだった。

「んだよ、こいつ。頭斬ったのに死んでない……」

「離れろ！雄斗！」

「伊月さん！」

いやね、俺も離れたいよ。でもね、ゾンビスライム（こいつ）が離れないから、逃げたくても逃げらんねぇんだよ。

「みんな！先に行け！俺も後から追うから……」

「バッカじゃない！早く来なさいよ！」

「そうですよ！」

「死亡フラグなんか立ててんじゃねぇ！雄斗！」

「とは言われてもな。つか、つべこべ言わずに先に行けよ。コイツ

ら片付けたら、行くから、待ってろ！」

俺は足に絡み付いたゾンビスライムの粘液をチェーンソーで斬り、距離をとる。

みんなは……逃げてくれたか。よしっ、思う存分性格破綻してやるか。

「さて、爆発のお時間ですよ。みんなで仲良く逝きましょうね☆」

俺は昨日作った鉄パイプ爆弾をゾンビの群れに投げた。

「伊月さん……」

「雄斗なら、きっと大丈夫だ。必ず、戻ってくる」

「そう、ですよね」

「……きっと、大丈夫」

私たちはゾンビスライム他を伊月さんに任せ、ショピングモールまで走っていた。

大体の敵は雅と竹下くんが伊月さんによる改造電動ガンで倒してくれた。

「よしっ、入ったらシャッターを閉じるぞ！」

笈川さんの声と工藤さんの先導で私たちは逃げきれた。伊月さんを除いては……。

「ヤバイな。ゾンビの習性を忘れてたよ。あいつら、どんどん群がってきやがる」

最初の爆弾でゾンビスライムは倒すことができたが、他から来るゾンビを掃討するには威力が全く足りなかった。

（残った爆弾は五つ。武器はチェーンソー、電動ガン一丁。弾は約２００発。こりゃキツいね）

俺は軽く苦笑しながら、電動ガンを構え、ゾンビの頭を撃ち抜いた。

「やるきゃないってね」

パンパンパン。

銃声？が鳴り響き、ゾンビか倒れ、群がってくる。

「数が多すぎる。くそっ」

俺はチェーンソーに手を伸ばし、掴もうとした。

「ふむ、中々の腕じゃな少年」

「誰だ！」

「私か？只のバーテンダーじゃ。訳アリのな」

俺の目の前には所々に白髪がある初老の男だった。

「アンタ……」

「いい機会じゃ、存分に見ておけ、本当の銃の使い方を」

「なにするつもりだ？」

「見ておれ」

カチャカチャ。

男の手には本物の銃、しかも、サブマシンガンという種別のはずだ。

でも、銃刀法違反じゃ……。

「いくぞ」

カチャ、ババババババババ。

男は片手で軽々しく操り、気づいたときには辺りは死体の山だった。

「ス、スゲェ」

「それほどでもない。それより、少年の電動ガンと鉄パイプ爆弾は素晴らしいのぉ」

「いえ、それほどでも」

「では、いかがいたします？」

「？」

「メニューじゃ」

「じゃあ、コーラで！」

俺は嬉々とした声で注文した。

第五話　いかがいたします？　じゃあ、コーラで！（後書き）

仲間と離れ、初老でメッチャ強い男と出会った雄斗はどうなるのか？

そして仲間たちは？

ご意見・ご感想御待ちしてます。

第六話　ホント、ゾンビが出てくるといるよね。銃持っている人（前書き）

お久しぶりです。
ノリで始めたにも拘わらずに意外と続かない。
でも、お気に入りにして下さる人がいるので、ついにパソコンで！
やりやすい！
本気でグダグダで面白い作品を作るぞ！

霧崎雅（きりさきみや）

年齢：１５

身長：１５４ｃｍ

ステータス

戦闘力：★★★☆☆

頭脳：★★★★☆

ユーモア：★☆☆☆☆

統率力：★★☆☆☆

顔の良さ：★★★☆☆

人物説明

由紀の友達で基本無口。

銃の扱いがうまい（電動のみ）。
雄斗、涼、翔のだれかに気がある。

第六話　ホント、ゾンビが出てくるといるよね。銃持っている人

「んで、おっさんだれ？」

「私か？私はただの場末のバーの従業員じゃ」

「ふーん、銃を持ってか？」

「御主も、明らかに法律違反じゃないか？」

「おっしゃる通りで」

俺とバーテンダーはあちこちから死臭のするバーで一杯やっていた。
もちろん俺はコーラだ。酒は飲まないぜ。

にしても、なんなんだこのおっさん？強いとかの次元を超えてるぞ。

まあ、それは置いといて、俺としては仲間たちの安否が気になる。
電話は……？戦闘で逝かれたから無理。

まさか、二日目で迷子と言うか、分断されるとは思わなかった。

「で、少年。あんなところでなにをやっておった？」

「んっ？爆殺？つか、名前教えてよ」

「なかなかに知気があるようじゃな。それに私の事が知りたいと？
まあ、いいじゃろ。名前は日向鳴海（ひなたなるみ）じゃ」

「うん、鳴海さんねぇ。俺は伊月雄斗」

「伊月、雄斗か。ふむ、どこぞできいた名じゃな。たしか、『返り血の雄斗』とか『デビル伊月』……不良の間じゃ有名な名じゃな」

このおっさん、わかって言ってるだろ。人の厨二病的通り名の事。

中学の時に一時期ものすごく荒れていた時があった。その時はまだ、涼にも翔にもあって無い頃の話だ。

俺は毎日毎日不良に絡み、全員をボコボコにして放置するという行動をまるで夢遊病のように繰り返した。

その時の事はあまり話した事がないはずだ。誰にも、涼や翔にすら……。

簡単にいえば、闇歴史だ。

でも、俺は笑えて過ごせている。それは間違えなくあいつらのおかげだろう。感謝してもしきれない。

だから、こんなときにしか恩返しはできないだろ？

護ってやるぐらいしかできないだろ。

俺は立ち上がり、鳴海さんにお礼をして立ち去ろうとした。

「じゃあ、ありがとうございました鳴海さん。俺は行くんで」

「待ちなさい。携帯直しておいたぞ」

「いつ」

「さっき」

……これはラッキーと言うべきだろうか？

まあ、つながんなら繋がるでいいや。

俺は早速かけてみた。

『雄斗、無事か！』

「おう、大丈夫だ。みんなは？」

『平気だ。それより、今どこだ！」

「お前らがそこを動くなよ。そっちの場所を教えてくれ」

『近所のショッピングセンターです！結構生存者もゾンビもいます』

「わかった。っていうか、電話代わりすぎじゃねぇ？なに、寂しかった？」

『『『『『無駄口言わずにさっさとしろ（して・してください・しなさい）！』』』』』

「すいません」

それだけの会話をし、俺は鳴海さんの方を向いた。

顔には温和そうな笑みが溢れ、銃をこちらに向けている。

「なっ！」

「少年……」

ダメだ。殺される。俺はそう思った瞬間に銃を投げられる。

それはオートマチック系のベレッタＭ９２Ｆだった。

そして、鳴海さんは笑顔で

「わしもついて行くぞい」

「もう、勝手にしてくれ」

俺は脱力して膝から崩れ落ちた。

――――日向鳴海が仲間になった――――

――――装備がレベルアップした――――

ＧＯ　ＴＯ　ＮＥＸＴ　ＳＴＡＧＥ．．．

第六話　ホント、ゾンビが出てくるといるよね。銃持っている人（後書き）

短めにしてしまいました。
次から新ステージ、開発編へ。
何を開発するかは秘密です。
こうなったら、秘密結社とかはいらないよね～。
とか、言ってみる。
果たして完結できるのか！？

第七話　対決バジリスク（前書き）

竹下（たけした）　登（のぼる）

年齢：１５

身長：１８２ｃｍ

頭脳：★★★☆☆

戦闘力：★★★☆☆

ユーモア：★★★☆☆

統率力：★★★☆☆

顔の良さ：★★★☆☆

特記事項

ガチホモですべてが平均のあんまり出てこないモブに近いキャラ。

一応、雄斗たちと同じ二年生。

うん、書く事がないＹＯ～。

第七話　対決バジリスク

ついた、うん、ついたよ、ついたんだけどねぇ～。ショッピングモール。
あはは、ゾンビ多いなぁ～。ざっと、百匹くらい？
もうなんか面倒だよね？こういうときは別ルートから入るのが定石だけどね。さて、何処から行くか。
ついでにこれを考えるまで約１秒。

「鳴海さん、良い抜け方わかんないっすか？」
「ない、な。そもそもここらはなんで囲まれているんだ？」
「さあ？音じゃないんすか？」

テンプレだとは思うんだけどね。と、雄斗は思った。しかし、それでも難しい顔をやめない鳴海。いや、それだけなら良かったんだけど、おもむろに銃を取り出して一発、群れへと叩きこんだ。
一斉にこっちを見るゾンビ。

「何してんＮｏＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！」
「ふむ、音に反応するのは本当じゃな」
「知るかぁー！つか、んなもんのために命かけようとすんなぁー！」
「なに、これだと、足りないくらいじゃ」
「はぁっ？」

鳴海は意味深な言葉を放つと、雄斗の見えないうちに何発も銃弾を撃っていた。
しかも、どれもヘッドショット♪……何、このチート？
そんな事を思っているうちに動きの鈍いゾンビは徐々に少なくなって、雄斗の目にも活路が見え始める。先程までの数から３／４ほど

に減れば、いける。
そして、雄斗は駆けだした。手には金属バット。近くにいたゾンビの顔にまずは、一発。減り込んだ隙に雄斗に噛みつこうとしたゾンビに鳴海が一発。バットを戻した雄斗は……

「牙○――――零式！」

某るろうにさんに出てくる三番隊隊長さんの必殺技を使う。さすがに金属バットでは突き抜けはしないが、うまい具合に二、三匹巻き込んで倒れた。そこにすかさず叩きつける。
……だけど

「一向に数が減らないっ！」
「ふむ、音に集まる性質だからかの？」
「じゃあ、銃しまえよっ！」
「とっくにしまった。だが、一向に来る数が減らん！」
「じゃあ……」

と、ここで雄斗は口を閉じた。
ズルズル。
何かが地面を引き摺る音。
それは鳴海にも聞こえたようだった。雄斗は油断なく金属バットを、鳴海は銃を構え、周りを見る。と……

「あぁー」
「シャアアア」

巨大な蛇がゾンビを丸呑みにしていた。

「ギャー！なにあれ！？」

「むっ、こりゃ絶対絶命じゃの」
「なんでよゆぅううー！？」

蛇がこっちを見る。中にはゾンビの残骸が散らばっている。だが、あの蛇が来てからはゾンビの数は増えていない。
ということは……

「こいつ、ゾンビを食ってるのか！？」
「そのようじゃの……」
「こんなの……」

どうすんだよっ！と悠斗が言葉を続けようとしたところでゾンビが近づいてきたので殴り殺そうとする。
だけど、目の前でゾンビは蛇に食われた。

「……っつ！」
「……速い！」

二者二様の反応を残す間がある程度はあったが、雄斗に向かって蛇が口を開け迫っているいるのでそれほど余裕ではない。
悠斗はなんとか口の横にダイブする形で避け、前転した後に鳴海から受け取ったベレッタを引き抜き、引き金を引く。が……
（当たらねぇ！）
銃弾は蛇の胴体の二十センチ上に行き、かすりもしなかった。
それどころか、爆発音が耳を襲い、キーンとし始める。
蛇……『バジリスク』とでもしておこうか。は顎を外し、今度こそ雄斗を丸呑みにしようとする。
　そんな蛇に対し、鳴海は射撃をするが、効いている雰囲気は無い。
――――そして、悠斗は抵抗らしい抵抗も出来ずに呑みこまれた。
それをただ、鳴海は事実として受け止めながら見ていたが、そんな

事ができるはずもないまま、ショックを受けるだろう人影が目の端に映るショッピングモールの窓から見ている確認してしまい、舌打ちをした。

◇

「そんな……雄斗が……なんで」

「嘘、だろ？これ……」

「伊月さん……」

そこには翔、涼、由紀がいた。

彼らは雄斗が来ると聞いて、「じゃあ、いくらか減らしておこう」という話になって、中のゾンビ掃討に出ていた。

その途中に外から銃声が聞こえたので外を見ると、雄斗と五十代半ばの男がゾンビ相手に無双しているのを確認した。しばらく見ていると、巨大な蛇が現れ、ゾンビと雄斗が食われたのだった。

「くっそ！」

「おいちょっと待て！涼！」

「なんでだよっ！雄斗が食われたのはさっきだ！それならまだ助かるだろ！？」

「俺たちが行ってどうにかなるのかっ！」

「知るか！俺は行くぞ！」

そう怒鳴りながら、涼は一階に行き、シャッターを開けに行った。

翔は頭を抱えながらも由紀に少しだけ命令してから後を追った。

◇

「ここは……暗いなぁ、あっ、蛇の腹ん中か？」

雄斗は食われたのを思い出し、若干歯ぎしりする。

でもその前に、ペンライトをつけた。

「つけなきゃよかったかも……」

雄斗は自分の下にゾンビが溜まっているのを見ていた。それも何匹も何匹も、手を動かしてこちらに来ようとするゾンビの群れだ。

気持ちの悪いことこの上ない。

だが、もし、あと少し落ちていればあの仲間になると考えると、気持ち悪いという考えより恐怖が勝る。

「とりあえずは、ここからの脱出かな？」

雄斗はナイフをポッケから取り出し、肉壁へと突き刺す。

痛みからだろう、大きく蛇の体が動いた。だが、さした本人はそんなことには気にせずにさらに二、三本突き刺す。

雄斗はそれを足場（手場か？）にして、上へ上へと上がっていく。

ある程度離れた位置に来たら、コンビニで奪ったライターで火をつけた自作の爆弾、それも手持ち全てを投げる。

そして、爆発、中は一直線のため、必然な事として爆風が来る。それに身を任せ、雄斗は口から出る事ができた。が……

「やべっ、着地の事考えてなかったわ……」

雄斗は宙を舞った。

◇

「来ちゃいました☆」

「……」

「……俺が言っておいた事は？」

「雅ちゃんに任せておきました！」

「あっ、そうなんだね……それは良かったよ」

そんな話をしている高校生たちを鳴海は見ていた。

もちろん、誰一人として知っている人はいないし、雄斗の事を問い詰められても何にも言えない。
そんな中でもバジリスクは嬉しそうに鎌首を持ち上げ、その場にいる生存者も歩く屍も睨む。
真っ先に動いたのは鳴海だった。少し整備が行き届いていない銃がジャムらないうちに周りのゾンビを撃ち滅ぼしていった。
次に動いたのは翔だった。
翔はたまたまショッピングモールでやっていた観賞用の刀をバジリスクの目に投げる。
苦しそうにうめきながらバジリスクは動く。それはちょうど、雄斗が肉壁にナイフを突き刺したのとほぼ同時だった。
バジリスクは大きく開いた顎をで雄斗と同じように翔を呑もうとする。
が、鳴海の銃弾がつぶされていない逆側の目に当たり、それの行動は中断された。
その隙に、涼は翔の突き刺した刀をさらに押し込む。

「シャアアアア」
「おいっ、とっとと」

激しく暴れまわるバジリスク。そしてその目に深く突き刺さった刀の塚を持って落ちないように耐える涼。
次の変化は唐突に訪れた。バジリスクの腹が膨らみ、爆発が起きた。
そして、苦しそうに開けた口からは雄斗が飛びだしてきた。

「やべっ、着地の事考えてなかったわ……」

とてもアホな様子だったが……。
空中を舞った雄斗は翔と由紀に抱かれ、押し倒した。
そして、

「「おかえり（なさい）！」」
「おう、ただいま！」
再開できたのだった。

第七話　対決バジリスク（後書き）

感想、ご意見お待ちしています

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1061v/

ゾンビがやって来た

2011年12月11日19時47分発行